

釧路市教育委員会 平成30年第15回10月定例会会議録

1 日時：平成30年10月30日（火）13時30分から14時25分まで

2 会場：釧路市教育委員会室

3 出席者

岡部義孝教育長

（教育委員）

山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員

（事務局）

高玉学校教育部長、川畑生涯学習部長、高松教育指導参事、
江縁学校教育部次長、藤岡総務課長、高木教育施設調整主幹、
小野施設計画主幹、土江田総括指導主事、坂本青少年育成センター所長、
仲谷学校教育課長、澤口生涯学習課長、工藤スポーツ課長、
北澤国体推進室長、佐藤博物館長、古賀動物園長、
牧野阿寒生涯学習課長、山田音別生涯学習課長

4 議事録署名人 松尾委員、種村委員

5 傍聴人数 0人

6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- (1) 「企画展 イピシンプのある生活～アイヌとイラクサとのかかわり～」の開催について
- (2) 『釧路・根室の簡易軌道』の「鉄道友の会島秀雄優秀著作賞・特別部門」受賞について
- (3) 学校の現状について

7 会議内容

【公開案件】 報告事項

(1) 「企画展 イピシンプのある生活～アイヌとイラクサとのかかわり～」の開催について

(佐藤博物館長)

博物館では、アイヌ民族文化財団の助成を受け11月10日(土)から来年1月20日(日)まで、博物館1階のマンモスホールにて企画展「イピシンプのある生活～アイヌとイラクサとのかかわり～」を開催する。

この企画展では、身近な植物である「イラクサ」をテーマに取り上げ、植物学的な観点をはじめ、イラクサが登場するアイヌの物語や伝承、繊維の取り出し方法など、アイヌ文化におけるイラクサの利用方法や関わりについて多角的な方面から紹介し、身近な植物の有用性や利点・利用技術等を紹介する。

また、これらを使った貴重なアイヌ衣服等を展示して、アイヌ文化における技術や知恵を伝えてゆく重要性を市民に紹介することを目的としている。

このほか、関連事業として、講師をお招きしてのアイヌの楽器「ムックリ」の製作体験やイラクサ糸作り、イラクサ糸を用いた小物製作などのワークショップも企画している。委員のみなさまにも、ぜひ足を運んでいただきたい。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

イラクサ=痛い、かゆい、近寄ってはいけないという認識で育ってきた自分にとって、アイヌの方々が繊維を有効利用しているということで、非常に興味をそそられる企画展だと思う。ぜひ足を運んでみたいと思った。

【公開案件】 報告事項

(2) 『釧路・根室の簡易軌道』の「鉄道友の会島秀雄優秀著作賞・特別部門」受賞について

(佐藤博物館長)

『釧路・根室の簡易軌道』は、2016年に開催した企画展の記録集として発行した冊子であるが、このたびこの記録集の出版について、釧路市立博物館が全国組織の鉄道趣味団体である鉄道友の会より「鉄道友の会 島秀雄優秀著作賞・特別部門」を受賞することとなった。

受賞の理由は、従来、体系化された資料が少なかった簡易軌道について、地元自治体に保存される資料や写真の掘り起こしを始め、各鉄道の職員だった人たちや沿線利用者の体験談や記録写真も多数掲載し、簡易軌道をまとめた書籍として充実した内容となっていることな

どがあげられている。

来る11月25日（日）に東京の学士会館で開催される贈呈式には、執筆にあたった当館の学芸専門員が出席する。

なお、本記録集は二度にわたる完売を経て、11月17日（土）から増補・改訂版の販売を開始する。また、同日2階常設展示室に新たに簡易軌道コーナーがオープンする予定となっている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

簡易軌道の過去どういう産業があつて、物を運ぶためにこういう鉄道が引かれていたという事を1冊にまとめてくれているという事は、釧路根室地方の歴史とか文化や産業を体系的に調べるために非常に有効なものだと思う。子どもたちに釧路の歴史を教えるために、簡易軌道の一つのキーワードにまとめるだけでもどういう産業がどういう場所にあつて、それを港に運ぶためにどういう簡易軌道が敷設されていたかということが、子どもたちにとっての貴重な資料になると思う。そこで確認と提案だが、子どもたちに釧路のふるさとの状況を知ってもらうため、釧路について学習するときこの冊子が学校にあるだけで、学習内容の幅や深みが先生方の扱いによっては膨らむと思う。ぜひ学校への配布が考えられないかどうか検討してもらいたい。また、学校の方にもこういう本があつて釧路を学ぶためには非常に有効な資料だというPRをぜひお願いしたい。

それから、次回副読本「くしろ」をまとめるときに、こういうものもある程度加味した内容の改編もあつてもいいと思う。参事から見解を聞きたい。

（高松教育指導参事）

副読本については、毎年専門委員会によって見直しを図り内容の更新に努めているので、実際の先生方の指導内容とこの本の中身を見ながら、取り入れるところがあれば積極的に取り入れていきたいと思う。

（佐藤博物館長）

博物館も、制作した冊子を全部販売に回すのではなくて、関係機関に配布する分も取っておくので、その中で学校にも配布できないか検討したいと思う。

【公開案件】 報告事項

（3）学校の現状について

（高松教育指導参事）

小学校での学芸発表会も今月20日を持って終了し、大きな行事が一区切りついたところである。「信頼」に基づいて、学校の現状について報告する。

まず初めに釧路市特別支援学級・学校学芸発表会について報告する。

11月10日（土）コーチャンフォー釧路文化ホールにおいて、特別支援学級の児童生徒が集い、日頃の学習の成果を発表する学芸発表会が開催される。

今年度は、小学校4校、中学校6校の児童生徒が参加し、劇やダンス、器楽演奏、影絵など、日頃の学習成果を発表する。コーチャンフォー釧路文化ホールという大きな舞台での発表・交流は、児童生徒にとっては大変貴重な機会である。

この学芸発表会は、様々な情勢から今年度をもって終了となる予定である。委員の皆様におかれましても、ご都合がつけばご鑑賞いただきたい。

次に学校経営訪問について報告する。

釧路教育局義務教育指導監と共に、5月から開始した学校経営訪問は、11月をもってすべての小中学校の1回目の訪問を終了する。今年度から2回目の訪問については、採用校長及び昇任教頭の学校に限るとしたことから、釧路市内では7校が対象となっている。

1回目の訪問では、すべての学級の授業参観を通して学校や子どもたちの様子、個々の先生方の頑張りなどの一端を垣間見ることができ、特に小学校では実物投影機を活用した授業が日常的に行われていることのほか、優れたノートの展示などそれぞれの学校が特色ある取組を進めていることに感心した。

また、学力のみならず体力向上の取組においても、校内〇〇チャンピオンなど、子どもの記録を掲示することによって運動意欲を促す取組、校内のスペースを活用して子どもが測定種目に馴染む環境づくりなどが工夫されていた。

多くの学校が組織力の向上と学力向上を重要課題としており、捉えた各学校の課題克服に対する成果を具体的な数値として示されるようになり、活動成果の見える化に取り組む状況を伺うことができた。

最後に学校の研究活動について報告する。

学校の文化的行事が終了し、11月以降は比較的大きな行事もなく学校ではそれぞれの学校の研修テーマに基づく授業研究に取り組む時期となった。「信頼」に示しているように11月中には7校が公開研究会を予定しており、うち阿寒湖中学校、景雲中学校、鳥取小学校、湖畔小学校の4校は、教育委員会の研究指定2年目として研究の集大成としての公開研究会となる。これら公開研究会の他、11月以降24校が特設授業による協議を行う。

授業を工夫する、構想する、実践することが授業力を高める一番の方法であり、教員同士が協働してお互いの授業を検討し、改善に結び付けていくためにも各学校の研究成果の価値づけなど、関わる指導主事の効果的な指導助言に努めていきたいと考えている。

◎この報告について各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

実物投影機について、非常に効果的であるということで、市教委でも計画的に配置できるように予算付けしているが、聞くところによると、学校に実物投影機がないが授業で使いたいという事で個人で実物投影機を買って使っている先生がいると聞いている。各学校に公的

に配置された台数が何台あって、個人的に所有して活用している先生が何人くらいいて、トータルでどのくらい充足されているかの調査をする必要があると思う。そして、まだ配置されていない台数が明らかになった段階で、どういう手だてが考えられるのかを検討する必要があると思う。

(江縁学校教育部次長)

公的には、今のペースだと3、4年後にはすべての学級に導入されることになっている。個人で所有している分には把握はしていない。

(山口委員)

これは強制力を持つという話ではないが、実際個人で所有して使っている人数の調査はかけてほしいと思う。実態を把握することも必要だと思う。

(松尾委員)

特別支援の発表会について、今年で最後という事で、参加校が減っているという事が理由として考えられるが、原因としては、特別支援だということと子どもたちが差別されているような気持ちからということもあるとは思う。そういう部分にはあまり線を引かない方がいいと思うが、発表の場としてはこちらの方が学校の学芸会よりはメインになってくれるという部分も考えられると思うので、いろいろな状況があるのは想像できるが、経緯について聞かせてもらいたい。

(山口委員)

今までのイベントが参加校が少なくてジリ貧になっていったという捉え方もできるが、今は拠点校から各学校に特別支援学級を配置して、普通学級と特別支援学級の垣根も下げて普通学級との交流も盛んになっていると思う。学芸会などでそういうハンディキャップを持った子どもたちが、他の子どもたちと一緒に発表する場面も多くなっていったと思う。トータルで考えれば、決して現象としてマイナスに流れていっているわけではないという受け止め方もできると思う。

(高松教育指導参事)

仰る通りで特別支援教育の導入後、昔は拠点校の特別支援学級という形だったが、今は、各学校での取組も通常学級の子どもたちと一緒にあって行って、それぞれの学年の発表に出るということから、いわゆる特学単体の発表がなくなったという事で、ここに持ち込める題材がなくなったこともあり、参加校が減っていき時代の流れとマッチングしないところや、休日に開催しているなどさまざまな状況から、宿泊交流会と併せてこの事業をやめることになったが、なくすのは非常に寂しいという事で、これに代わる下流部のブロックごとに特別支援学級の交流する機会は企画している。

(小出委員)

特別支援学級の発表会が来年からなくなったら、今コーチャンフォー釧路文化ホールで発表するために練習しているステージ上で発表するものは、各学校の学芸会や文化祭で発表する場に移るという事か。

(高松教育指導参事)

おそらく各学校の学芸会、文化祭で特別支援学級の集団として、発表しているものをまた改めて今回発表しているので、各学校だけの発表という事になる。

(山口委員)

学校の先生方の意識として、どういう形で横の連携、交流、要するにどの学校も学力、体力向上に力を入れていることはよくわかるが、それが成果となって表れている学校と頑張っているけどなかなか成果が表れていない学校があり、縦の異校種間の連携も去ることながら、同校種間の横の連携ももっともっとあっていいと思う。その時に、実際授業を見て公開研等で学びあうという一般の先生方が参加する機会はもちろん、学校全体としてこういう取組をやったら成果が表れたという全体像を企画して推進していく立場の教務主任や主幹教諭の先生が、横の連携で情報交流をして、成果が表れている学校の実践に成果が表れていない学校が聞いて学ぶだとかそういう交流も積極的にやるべきだと思う。

(土江田総括指導主事)

教務主任や主幹教諭等で、学校の運営に携わっている先生方を集めて、実践の報告であったり道の事業に取り組んでいる学校もあるので、それらの取組を共有できるように教務主任に関しては年に2回ほど集まって交流の場を設けている。学力だけではなく、その他さまざまな進んだ取組に関して「釧路市の教育」に記載しているだけではなく、実際に見聞きできるように行っている学校の先生方を呼んで、話を聞くなどの交流を今も進めているが今後も進めていきたいと考えている。また夏休みのときに、長期休業の取組の方法に関してもご指摘があったので、次回行われる教務担当者会議の中で、実務レベルでの交流ができるよう計画しているところである。

(山口委員)

基礎学力検証改善委員会の取組もそうだが、こういう課題があるのでこういう組織でこういう取組をしました、というそこまではいいのだが、実際やってみてどうだったのかという次のつっこみについて、戦略を具体化して前に進めていくことも必要だと思う。教務主任クラスの先生を集めて交流することはもちろんやるべきだが、やってみて結果どうだった、次にどういう手だてが必要なのかまさに PDCA のマネジメントサイクルそのものだと思うので、そういういろいろな課題を解決して前に進めていくためにはそういう発想がこれから必要になると思う。

(土江田総括指導主事)

基礎学力検証改善委員会の持ち方、それから先生方全部に委員会で提唱されたことが周知されているかというあたりも検証しながら、先生方全員に知れ渡っているかを確認できるような方法で委員会を持たなければいけないと話していたところだったので、何らかの方法を考えたいと思う。